令和元年度
-2019-

作品集

気づいてる？　あなたのまわりの　あたたかさ

京都府青少年健全育成府民運動スローガン

小学生対象

第 23 回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」

中学生対象

第 41 回「少年の主張京都府大会」

公益社団法人　京都府青少年育成協会

はじめに

（公社）京都府青少年育成協会では、明るい家庭づくりや青少年の豊かな心を育むため、小学生を対象とした「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」、中学生を対象とした「少年の主張京都府大会」（京都府ＰＴＡ協議会や京都市ＰＴＡ連絡協議会、（独）国立青少年教育振興機構との共催）の二つの公募事業を行っています。

「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」は、小学生の目から見た家族や家庭内での微笑ましいふれあいを絵に表現することを通して、子どもたちの健やかな成長にとって家庭の役割の大切さを再認識することを目的として実施しています。第二十三回となる本年度は、六十五校から六百七十三点の心温まる絵画作品の応募をいただき、知事賞には、木村悠人くん（木津川市立城山台小学校二年生）の作品が選ばれました。入賞された作品二十三点による入賞作品展を一月六日から五月六日にかけて、府内十九箇所で開催しています。

「少年の主張京都府大会」は、人格を形成する上で重要な時期にある中学生が、日常生活の中で感じていることや考えていることなどを自分の言葉でまとめ、それを「少年の主張」として広く訴える機会を設け、社会の一員としての自覚と行動を促していくことを目的として、昭和五十四年度から実施しています。第四十一回の本年度は、三十二校から四千七百十三編の素晴らしい作文の応募をいただき、事前審査委員会で選出された十六名の中学生が、京都府大会において主張を発表しました。

京都府大会で京都府知事賞に輝いた堤菜々さん（亀岡市立南桑中学校 三年生）は京都府代表として、十二月に開催された全国大会（東京）において、中部・近畿ブロック代表として発表し、国立青少年教育振興機構奨励賞を受賞されました。

御応募いただいた小学生・中学生の皆さんをはじめ、事業の実施に御支援・御協力をいただきました学校や保護者の皆様並びに関係機関・団体の皆様、さらには熱心に作品の審査をしていただきました審査委員の皆様方に心から感謝とお礼を申し上げます。

この冊子では、それぞれの事業で入賞された作品を紹介しております。御高覧いただき、小学生の抱く家庭の温かさ、中学生の思いや主張をそれぞれの作品から感じ取っていただければ幸いです。

そして、これらの事業が応募いただいた皆さんの心の成長の一助となりますことを念願いたしますとともに、取組の裾野が広がり、青少年の健全育成の輪が一層広がっていくことを期待します。

令和二年三月

公益社団法人京都府青少年育成協会

会長　上田静男

目次

第二十三回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」

◇第二十三回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」　概要　……2

◇入賞者、佳作者一覧　……3

◇入賞作品　……4

◇講　評　……9

第四十一回「少年の主張京都府大会」

◇第四十一回「少年の主張京都府大会」　概要　……10

◇入賞者、佳作者一覧　……11

◇入賞作文　……12

◇講　評　……28

◇第四十一回「少年の主張全国大会」内閣総理大臣賞　受賞作文　……29

第23回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」

入賞者・佳作者一覧

入賞

賞	テーマ	氏名	学校・学年
京都府知事賞	お庭の野菜、家族でとったよ。	木村　悠人	木津川市立城山台小学校２年
京都府青少年育成協会会長賞	かぞくとの　だいすきな　じかん	山下　紗里	舞鶴市立新舞鶴小学校１年
京都府教育委員会教育長賞	妹のたん生日	中　　和俊	木津川市立上狛小学校１年
京都市長賞	わたしの　たんじょうび	川村　真央	京都市立西院小学校２年
京都市教育長賞	家族でお花見	小玉すみれ	京都市立朱雀第二小学校４年
京都府市町村教育委員会連合会会長賞	かぞくは　ぼくの　おうえんだん！	常石　龍叶	京田辺市立田辺小学校１年
京都府小学校校長会会長賞	鳥ば水ぞくかんに　行ったとき	宗片　こと	城陽市立青谷小学校２年
京都市小学校長会会長賞	おさらが　いっぱい　たいへんだ！	由良　百蘭	京都市立仁和小学校１年
京都新聞賞	みんなで楽しくお外にいる姿	伊藤　咲良	宇治田原町立宇治田原小学校１年
NHK 京都放送局局長賞	楽しい夕食	藤岡　逢美	京田辺市立三山木小学校４年
優秀賞	我が家の夏は流しそうめん	竹内　莉乃	宇治市立大久保小学校５年
	かぞく　みんなで　海に　行った	後藤　颯翔	城陽市立青谷小学校２年
	かぞく　みんなで　ポカポカ　おふろ	中島　沙羅	城陽市立青谷小学校２年
	みんなで　行った　キャンプの　よる	藤井　和歩	京田辺市立田辺小学校１年
	明るい家族	井上優華梨	京田辺市立三山木小学校３年
	にこにこで　えいよう　まん点だ	星山　礼奈	木津川市立城山台小学校２年
	ぼくの　あたらしい　かぞく	名越　世南	木津川市立城山台小学校２年
	たのしかったな	阿部　紀人	木津川市立城山台小学校４年
	かぞく　みんなと　スイカを　たべたよ	望月　大誠	木津川市立梅美台小学校２年
	みんな　なかよし　たんじょうび会	二俣　和央	木津川市立南加茂台小学校３年
	かぞくで　むしとり　たのしいな	福田　悠斗	木津川市立上狛小学校１年
	家族で海水浴	幾馬　　輝	木津川市立上狛小学校１年
	水ぞく館へ家ぞくで行ったよ	宇野　蘭紗	綾部市立豊里小学校２年

佳作

氏名	学校・学年	氏名	学校・学年
髙倉瑠璃人	京都市立百々小学校３年	西村　心晴	相楽東部広域連合立笠置小学校３年
佐々木悠愛	京都市立明徳小学校５年	村田　悠至	相楽東部広域連合立和束小学校１年
海老名心朗	長岡京市立長岡第四小学校２年	南山みいな	相楽東部広域連合立南山城小学校２年
竹内　　鞠	京田辺市立草内小学校２年	木下　紗来	亀岡市立南つつじヶ丘小学校３年
林　　夏月	木津川市立木津小学校２年	山内　慈元	綾部市立西八田小学校４年
吉田　朋生	木津川市立州見台小学校２年	髙橋　理桜	舞鶴市立余内小学校４年
村山　斗蒔	久御山町立佐山小学校　６年	田中　　悠	舞鶴市立倉梯小学校１年
松山　璃都	宇治田原町立田原小学校２年	森戸総一朗	舞鶴市立高野小学校１年
奥川　瑞貴	精華町立精北小学校２年	開　　花夏	舞鶴市立大浦小学校１年
鈴江　春翔	精華町立山田荘小学校２年	宇都宮夏樹	宮津市立日置小学校３年
片山　瑠愛	精華町立東光小学校３年	吉岡　瑛都	京丹後市立橘小学校３年

第 23 回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」概　要

1　趣旨

小学生の眼から見た家庭内での微笑ましいふれあいを絵に表現することを通して、子どもたちの健やかな成長にとって家庭の役割の大切さを再認識していただくため、「家庭の日」絵画展を実施した。

2　主催　公益社団法人京都府青少年育成協会

3　後援　京都府・京都府教育委員会・京都市・京都市教育委員会・京都府市町村教育委員会連合会・京都府小学校校長会・京都市小学校長会・京都私立小学校連合会・京都新聞・朝日新聞京都総局・毎日新聞社京都支局・読売新聞・京都総局・産経新聞社京都総局・日本経済新聞社京都支社・NHK京都放送局・KBS京都(順不同)

4　作品募集

(1)題材　　親子や家庭におけるほほえましい雰囲気等を表現したもの。
(2)対象　　京都府内の小学校及び特別支援学校小学部に在籍している児童。
(3)大きさ　　四つ切(38cm×54cm)、横書き
(4)画材等　　自由
(5)募集締切　　令和元年９月９日(月)(当日消印有効)
(6)応募方法　　必要事項を記入した所定の応募票(*2)を作品裏面にのりづけして、各学校で取りまとめて、京都府青少年育成協会事務局へ応募する。なお、個人で応募される場合は、直接京都府青少年育成協会事務局へ送付も可とする。
　*1 作品は、一人一作品で未発表、自作のものに限る。
　*2 応募票は、京都府青少年育成協会ホームページからダウンロードすること。
　【HP　http://www.kyoto-seishonen.or.jp/】

5　審査及び入賞作品等

(1)入賞作品等
　京都府知事賞１点　京都府青少年育成協会会長賞１点　京都府教育委員会教育長賞１点　京都市長賞１点
　京都市教育長賞１点　京都府市町村教育委員会連合会会長賞１点　京都府小学校校長会会長賞１点
　京都市小学校長会会長賞１点　京都新聞賞１点　NHK京都放送局局長賞１点　／10 点
　優秀賞　／13 点　佳作　／22 点
(2)審査　審査委員会で入賞及び佳作を決定した。
(3)審査委員 (50 音順・敬称略)
　上 田 静 男(委員長)
　久 米 昌 代(委員)　椙 山 直 美(委員)　谷 本 和 子(委員)
　二 宮 靖 男(委員)　野 木 孝 洋(委員)　羽 田　　浩(委員)

6　表彰

令和２年１月25日(土)に開催した令和元年度「京都府青少年すこやかフォーラム」(舞鶴市中総合会館「コミュニティホール」)において、入賞者の表彰と入賞作品の展示を行った。

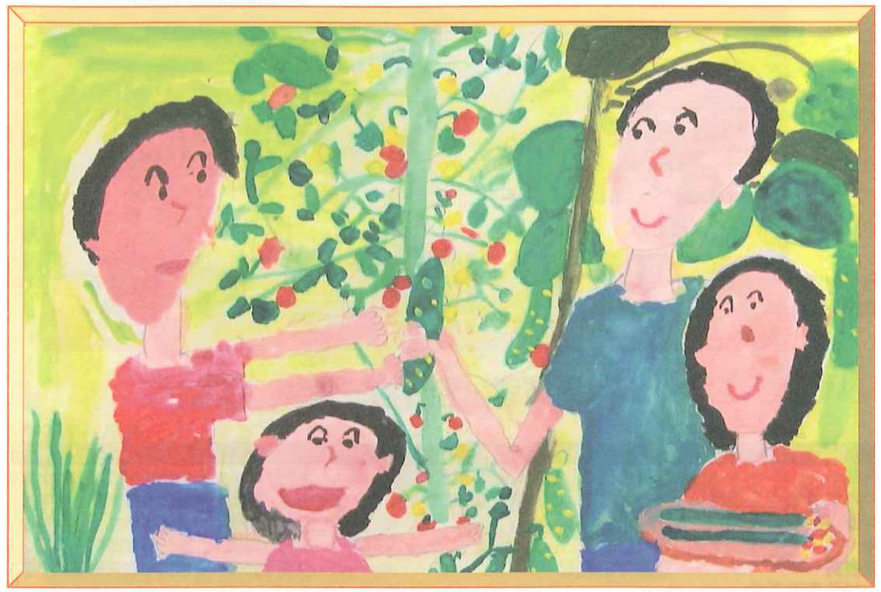
7　入賞作品展の開催

①京都府庁会場	(京都府庁２号館)	１月　６日(月)10 時～　９日(木)16 時
②京都市会場	(京都市中京区役所)	１月10 日(金)13 時～15 日(水)15 時
③宇治田原町会場	(宇治田原町総合文化センター)	１月16 日(木)13 時～20 日(月)10 時
④精華町会場	(精華町役場)	１月20 日(月)15 時～24 日(金)15 時
⑤舞鶴市会場１	(舞鶴市中総合会館)	１月25 日(土)13 時～16 時
⑥舞鶴市会場２	(舞鶴市役所)	１月27 日(月)12 時～31 日(金)12 時
⑦亀岡市会場	(亀岡市役所)	２月　１日(土)　９時～　７日(金)12 時
⑧木津川市会場	(木津川市立中央図書館)	２月　８日(土)　９時～14 日(金)12 時
⑨久御山町会場	(久御山町役場)	２月15 日(土)　９時～21 日(金)12 時
⑩相楽東部会場	(和束町役場)	２月25 日(火)　９時～28 日(金)12 時
⑪城陽市会場	(城陽市役所)	３月　２日(月)　９時～　６日(金)12 時
⑫京田辺市会場	(京田辺市立中央公民館)	３月　７日(土)　９時～13 日(金)12 時
⑬乙訓会場	(京都府乙訓総合庁舎)	３月16 日(月)　９時～19 日(木)15 時
⑭綾部市会場	(I･Tビル)	３月23 日(月)13 時～27 日(金)12 時
⑮宮津市会場１	(京都府立青少年海洋センター(マリーンピア))	３月28 日(土)　９時～４月６日(月)16 時
⑯宮津市会場２	(宮津阪急ビル(ミップル))	４月　７日(火)13 時～14 日(火)12 時
⑰与謝野町会場	(与謝野町立生涯学習センター(知遊館))	４月15 日(水)　９時～21 日(火)12 時
⑱京丹後市会場	(峰山地域公民館)	４月22 日(水)　９時～28 日(火)12 時
⑲宇治市会場	(宇治市中央公民館)	４月29 日(水)　９時～５月６日(水)17 時

8　その他

(1) 応募者には、参加賞を進呈した。
(2) 入賞作品は、入賞作品展で掲示するほか作品集、啓発資料等に活用する。
　(作品の活用時に、作品の画題及び学校名・学年・氏名を記載する。)
(3) 入賞作品の出版権は、(公社)京都府青少年育成協会に帰属すること。

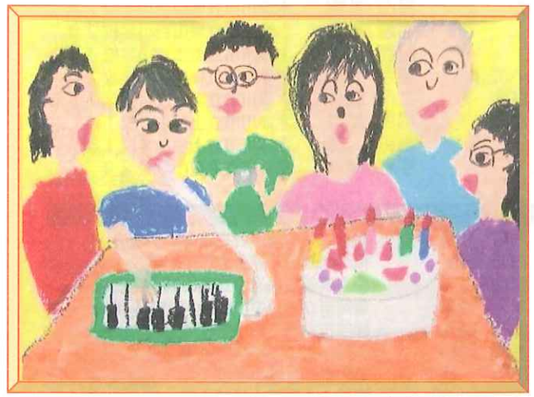
京都府知事賞 「お庭の野菜、家族でとったよ。」



木津川市立城山台小学校２年　木村　悠人くん

京都府教育委員会教育長賞

「妹のたん生日」



木津川市立上狛小学校１年
中　　和俊くん

京都府青少年育成協会会長賞

「かぞくとの　だいすきな　じかん」

舞鶴市立新舞鶴小学校１年
山下　紗里さん

京都市教育長賞

「家族でお花見」

京都市立朱雀第二小学校４年
小玉　すみれさん

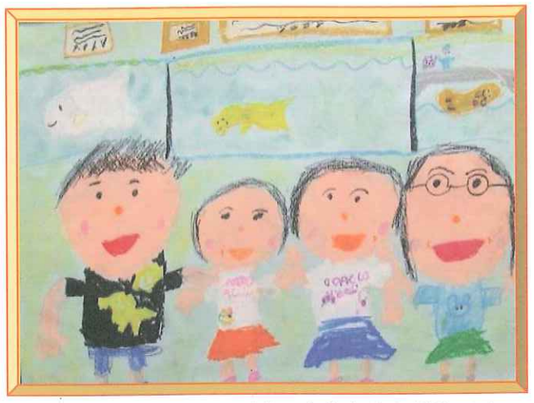
京都市長賞

「わたしの　たんじょうび」

京都市立西院小学校２年
川村　真央さん

京都府小学校校長会会長賞

「鳥ば水ぞくかんに　行ったとき」



城陽市立青谷小学校２年
宗片　ことさん

京都府市町村教育委員会連合会会長賞

「かぞくは　ぼくの　おうえんだん！」

京田辺市立田辺小学校１年
常石　龍叶くん

京都新聞賞

「みんなで楽しくお外にいる姿」

宇治田原町立宇治田原小学校１年
伊藤　咲良さん

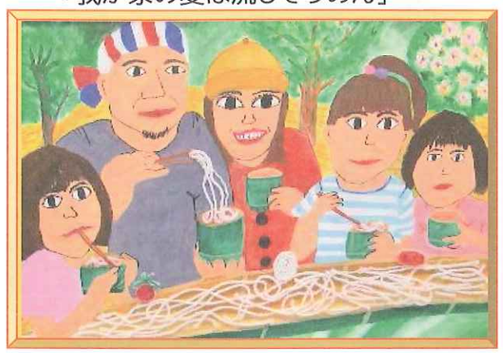
京都市小学校長会会長賞

「おさらが　いっぱい　たいへんだ！」

京都市立仁和小学校１年
由良　百蘭さん

優秀賞

「我が家の夏は流しそうめん」



宇治市立大久保小学校５年　竹内　莉乃さん

NHK京都放送局局長賞

「楽しい夕食」

京田辺市立三山木小学校４年
藤岡　逢美さん

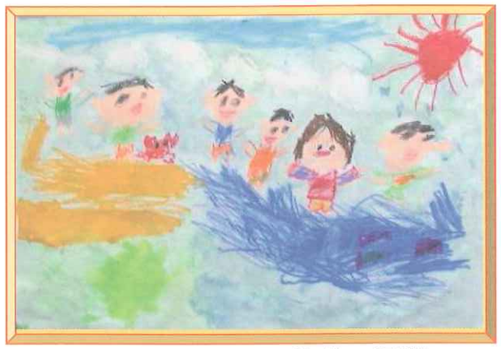
優秀賞

「かぞく　みんなで　ポカポカ　おふろ」

城陽市立青谷小学校２年　中島　沙羅さん

優秀賞

「かぞく　みんなで　海に　行った」



城陽市立青谷小学校２年　後藤　颯翔くん

優秀賞

「明るい家族」

京田辺市立三山木小学校３年　井上優華梨さん

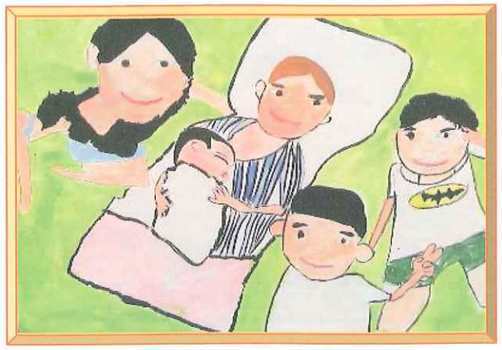
優秀賞

「みんなで　行った　キャンプの　よる」

京田辺市立田辺小学校１年　藤井　和歩くん

優秀賞

「ぼくの　あたらしい　かぞく」



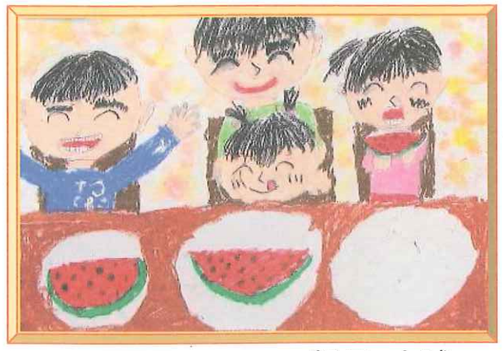
木津川市立城山台小学校２年　名越　世南さん

優秀賞

「にこにこで　えいよう　まん点だ」

木津川市立城山台小学校２年　星山　礼奈さん

優秀賞
「かぞく みんなと スイカを たべたよ」



木津川市立梅美台小学校２年 望月 大誠くん

優秀賞
「たのしかったな」

木津川市立城山台小学校４年 阿部 紀人くん

優秀賞
「かぞくで むしとり たのしいな」

木津川市立上狛小学校１年 福田 悠斗くん

優秀賞
「みんな なかよし たんじょうび会」

木津川市立南加茂台小学校３年 二俣 和央くん

優秀賞
「水ぞく館へ家ぞくで行ったよ」

綾部市立豊里小学校２年 宇野 蘭紗さん

優秀賞
「家族で海水浴」

木津川市立上狛小学校１年 幾馬 輝くん

第 23 回「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」

講 評

今年度の「明るい家庭づくり（家庭の日）絵画展」には、府内 65 校から、673 点というたくさんの応募がありました。どの作品からも子どもたちが家庭を中心とした生活の中で感じた温かさや和やかな雰囲気がよく伝わってきました。また、感じたことや考えたことを懸命に絵に表そうと努力している様子が伝わり、その表現に向かう姿勢が、作品の良さを一層高めているように思いました。

子どもたちの作品は、特に、家族や友達と何かをしたときの「楽しかった」「うれしかった」という気持ちが、絵の中にあふれていました。キャンプやお花見など、家族で出かけたときのこと。ケーキを前に家族でお祝いする一場面。家族とお風呂でのほっこり笑顔。家族みんなで食事をしたり、野菜の収穫をしたり、何気ない普段の生活での家族の様子。家族と一緒にいること、体験できることの喜びとともに、親子や家庭内におけるほほえましい雰囲気が良く伝わってきました。

審査に当たっては、絵画としての素晴らしさはもちろん、「明るい家庭づくり運動」の趣旨に照らし、家族の心のつながりや温かい雰囲気が、それぞれの子どもらしい発想や表現で伝わってくる作品を選考しました。

家庭教育は、すべての教育の出発点です。家族のふれ合いを通して、子どもが、基本的な生活習慣や生活能力、人に対する信頼感、豊かな情操、他人に対する思いやり、基本的倫理観、自尊心や自立心、社会的なマナーなどを身につけていく上で重要な役割を果たしています。

しかし、最近は社会やライフスタイルの変容を背景に、家庭でのコミュニケーションが希薄になってきているとの指摘もあります。ぜひとも、この機会に子どもたちが取り組んだ素晴らしい作品とともに、家庭の果たす役割の大切さについて考えたいところです。

コンクールを通して、改めて子どもたちの健やかな成長のために家庭の果たす役割の大切さが再認識され、家庭内での会話や豊かな体験の機会が一層増えていくことを期待しまして、審査講評とさせていただきます。

京都府教育庁指導部学校教育課
指導主事 椙山 直美

第四十一回『少年の主張京都府大会』　概要

1　趣　旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心をもち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められている。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切である。

少年の主張京都府大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施した。

2　主　催

（公社）京都府青少年育成協会・京都府ＰＴＡ協議会・
京都市ＰＴＡ連絡協議会・（独）国立青少年教育振興機構

3　後　援

京都府・京都府教育委員会・京都市・京都市教育委員会・京都府市町村教育委員会連合会・京都府公立中学校長会・京都府私立中学高等学校連合会・京都新聞・朝日新聞京都総局・毎日新聞社京都支局・読売新聞京都総局・産経新聞社京都総局・日本経済新聞社京都支社・ＮＨＫ京都放送局・ＫＢＳ京都・エフエム京都（順不同）

4　作文の内容

（1）社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。

（2）家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友だちとの関わりなど。

（3）テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

5　応募対象

京都府内の中学校及び特別支援学校中等部に在籍している生徒。
国籍は問いませんが、日本語で発表できることが必要。
なお、作品は一人一作品で未発表、自作のものに限る。

6　経　過

（1）作文募集

四月下旬、募集要項及びポスター等作成。府内各市町村・市町村教育委員会、各中学校、青少年団体、関係施設等へ配布して募集。

（2）募集締切

八月二日（金）応募総数　四千七百十三編（三十二校）

（3）応募作文の審査

九月四日（水）、事前審査委員会を開催、入選十六編及び佳作二十九編を選定。

（4）「少年の主張京都府大会」

九月二十二日（日）、京都府総合教育センター「講堂」において、本大会を開催。

十六名の入選者が主張を発表。審査の結果、各賞を決定。

［審査委員］（五十音順・敬称略）

野村　大輔（委員長）
石川　一郎（委員）上田　静男（委員）植月　明彦（委員）
立垣　典子（委員）船川　昇（委員）松元　伸祥（委員）
水谷　公祐（委員）柳澤　彰紀（委員）

（5）「少年の主張」全国大会への推薦

十二月八日（日）に東京で開催された全国大会の出場候補者として、京都府知事賞を受賞した、亀岡市立南桑中学三年生　堤　菜々さん　を推薦し、審査の結果、中部・近畿ブロック代表として全国大会で主張を発表し、国立青少年教育振興機構奨励賞を受賞された。

第41回「少年の主張京都府大会」

入賞　　入賞者・佳作者一覧

賞	テーマ	氏　名	学校・学年
京都府知事賞	「ネット社会における『見る』ということ」	堤　菜々	亀岡市立南桑中学校３年
京都府青少年育成協会会長賞	「ゴミゼロ」の未来に向かって	古本　ノア	亀岡市立別院中学校１年
京都府教育委員会教育長賞	プラスチックフリーライフをめざして	菅原　龍佑	亀岡市立亀岡中学校３年
京都市教育長賞	「命の大切さをもっと多くの人に」	大坂　昊雅	京都市立桃山中学校１年
京都府市町村教育委員会連合会会長賞	言葉にこめる思い	村山　浬子	亀岡市立東輝中学校２年
京都府公立中学校長会会長賞	「備えあれば憂いなし」	鰺坂　一輝	京都府立南陽高等学校附属中学校１年
京都府ＰＴＡ協議会会長賞	目に見えない大切なもの	坂崎　友香	木津川市立木津第二中学校３年
京都市ＰＴＡ連絡協議会会長賞	能から考える伝統文化の未来	中馬　千陽	京都府立洛北高等学校附属中学校３年
京都新聞賞	制服に見る男女格差	辰巳　讃良	京都府立福知山高等学校附属中学校２年
ＫＢＳ京都賞	〝人間の無責任な行動によって失われた命〜犬猫の殺処分について〜〟	大城みなみ	向日市立西ノ岡中学校３年
京都府青少年育成協会会長奨励賞	勉強する理由	上田　新奈	向日市立寺戸中学校２年
〃	相手を理解するということ	柴垣　歩乃	相楽東部広域連合立笠置中学校３年
〃	これからの社会に大切なこと	添田　一作	舞鶴市立加佐中学校１年
〃	言葉の選び方	早村　桃音	舞鶴市立青葉中学校３年
〃	「音での繋がり」	福田　陽生	舞鶴市立城北中学校３年
〃	あの日のポピーを眺めて	有田　芽以	京都文教中学校１年

佳作

氏　名	学校・学年	氏　名	学校・学年
福岡　由菜	京都市立安祥寺中学校３年	船越　菜月	舞鶴市立白糸中学校３年
九谷田瑠流	京都市立双ヶ丘中学校２年	大島　聖	舞鶴市立和田中学校３年
池上　結愛	京都市立勧修中学校２年	上野　美咲	舞鶴市立城南中学校３年
荻野　美咲	向日市立西ノ岡中学校３年	眞下恭市郎	舞鶴市立若浦中学校２年
冨田　晴伽	向日市立西ノ岡中学校３年	日渡　英里	京都府立洛北高等学校附属中学校２年
菅　遥輝	向日市立西ノ岡中学校３年	淀谷　日菜	京都府立洛北高等学校附属中学校３年
山下　青葉	向日市立寺戸中学校１年	伊藤　杏莉	京都府立洛北高等学校附属中学校１年
大木　聡子	城陽市立南城陽中学校１年	船越　慈世	京都府立洛北高等学校附属中学校１年
河原　真子	木津川市立木津中学校３年	竹下ひかる	京都府立洛北高等学校附属中学校２年
吉田琉輝斗	亀岡市立東輝中学校１年	只友　明徳	京都府立洛北高等学校附属中学校２年
河原　都子	亀岡市立東輝中学校３年	司辻　麗乃	京都府立洛北高等学校附属中学校２年
熊谷　美章	亀岡市立東輝中学校３年	白井　悠登	京都府立洛北高等学校附属中学校３年
長野　楓	亀岡市立東輝中学校１年	丸岡　美空	京都府立園部高等学校附属中学校１年
河本　環	南丹市立園部中学校２年	増井くるみ	京都光華中学校３年
小野　陽菜	南丹市立美山中学校３年		

京都府知事賞

「ネット社会における『見る』ということ」

亀岡市立南桑中学校　3年
堤　菜々

私はツイッターユーザーです。ツイッターには色々な人がいます。素敵な作品を投稿する人、面白い写真や動画をアップロードする人、日々の何気ない出来事を呟く人と様々で、見ていて本当に飽きないＳＮＳで、個人的にはとても好きなサービスです。しかし、そのツイッターを見ていて、とても不快になったことがあったのです。

少し前の休日のことでした。久しぶりにゆっくりできるのをいいことに、いつものように私は、だらだらとツイッターを見ていました。そして、そこに「自殺」という文字がトレンド入りしているのを見つけました。その日私はニュースを見ていなかったので、「何かあったのか」と知りたくなってページを開きました。どうやらその日大阪で、ビルの屋上から転落した人がいたらしく、大きな話題となっていたようでした。「現場を見た。」「びっくりした。」「どうして？」等、呟きが多々寄せられていました。私は人が死んでしまう瞬間を目の当たりにしたことがないので、少し怖くなりました。スマホの画面から目が離せなくなり、下へ下へとスクロールしていくと、そこには、目を疑うような光景が広がっていたのです。

「消されてしまったので再掲します笑」という短い文章と共に、添付されていた動画。実際の現場で撮られたと思われる動画は、私の「本当は見たくない。」という気持ちなど構うことなく、勝手に再生されてしまいました。人が転落していく映像が目に飛び込み、「パン！」という破裂音のような爆音が、イヤホンから流れ込んできたのです。私は気分が悪くなり、イヤホンを耳から外し取りました。心臓がばくばくしていました。「この人は一体、どんな気持ちでこの動画を撮ったんだろう」そう思いました。そのツイートのリプライ欄には、「おい、今すぐ消せ。」「わざわざ載せるな。」と、投稿者を批判する声がたくさんありました。しかし、「こいつ、アホじゃねーの。」「自殺とか馬鹿だろ。」と面白がり、自殺した人を馬鹿にするようなリプライも同じくらいたくさんあり、とても残念な気持ちになりました。

命は、どの人の命も尊く、大切なものです。何があっても、馬鹿にされて良いものではありません。自ら命を絶ってしまった彼女の命も、かけがえは何一つわかりませんが、彼女のことは、私にのないこの世にたった一つの宝物であったはずです。その大切な大切な命を、自らの決断で終わらせなければならなかった彼女。その決断に至るまでには、相当な苦悩と葛藤があったに違いありません。彼女は、ビルの屋上を自らの死に場所に選びました。もしかしたら彼女は、「自分の生きた証」を残すために、「不特定多数の人が見ている所」を選んだのかもしれません。そんな彼女の苦悩や葛藤、生きた証が、好奇の眼、無機質なカメラのレンズに捉えられ、インターネットの冷たい海に放り出され、人目に晒され、叩かれ、嘲笑われている。「いいね」やリツイートの反応稼ぎのため、投稿者のちっぽけな承認欲求のために、人一人の命が、エンターテイメントのように扱われている。目の前で起きているネット社会の参状に、私はとても腹が立ちました。

ＳＮＳは、ここ数年で一気に私たちの生活に浸透してきました。あると便利で重宝するＳＮＳですが、最近は不快になる投稿も多いように思います。公共施設での悪質行為を動画で投稿したり、嘘やデマの内容を投稿して混乱を招いたりと、社会問題となる投稿もよく見かけます。そしてそれは、メディアで報道され、議論もされるようになって、広く問題視されるようにもなってきました。急速に情報化が進み、ネット社会になった今だからこそ、ＳＮＳの本質を見極め、あり方を見直していく必要があると、私は思います。

普段の日常生活の中で起きる面白いこと、楽しいこと、嬉しいこと、悲しいこと、腹の立つこと、驚いたこと、それらのこと全てに、まず合わせるのは、あなたの「目」、「心の目」です。カメラのピントではありません。「目」を合わせ、「心の目」で見極め、しっかりと判断していくことが大切です。何でもまずは、「目」を合わせて物事を見ていきましょう。一件の「いいね」、一件のリツイートよりも大切なことが、きっと見えてくるはずだと私は思います。

京都府青少年育成協会会長賞

「『ゴミゼロ』の未来に向かって」

亀岡市立別院中学校　1年
古本ノア

「山にゴミを捨てないで。」これが私の主張でした。

私の住む、亀岡市東別院町は簡単に言えば「山」です。その一言で表現できるほど、どこを見ても緑、緑、緑…、そう、田舎です。四季を感じ、田畑の風景に目をみはり、植物の生長を感じる。キツネ、鹿、いのしし、サルなどの野生動物と共存し、梅雨の前にはホタルが舞う。少し不便な所もあるけれど、とても美しく自然豊かな町です。

そんな自慢の町にも、問題があります。不法投棄です。一歩森に入れば、タバコの吸い殻、さらには服や冷蔵庫まで。小学校で不法投棄について学習した私は、大きなショックを受けました。大学でゴミ問題を研究されている先生が話してくださった「ゴミが増え続けた場合の未来」が私の住む町でも起こってしまうのかと思うと、恐ろしくて仕方ありませんでした。

実際に川へ行きゴミを拾ってみて愕然としました。自然豊かな町だからこそ、一見すると綺麗に見える川。しかし、川辺の草むらをかき分け、水の流れの中を網でさらってみると、お菓子の袋やキャップ、ビニール袋など、プラスチックゴミが非常に多くありました。特に大雨が降った後はすさまじく、あちこちからゴミが流され、川は汚れてしまっていました。故郷が汚れていく様子を目にすることは、私にとってとても辛いことでした。

そんなとき、私はニュースで目にしたあの映像を思い出しました。ウミガメの鼻にストローが刺さっている映像です。私はそのニュースを見たとき、思わず目を背けてしまいました。目にいっぱい涙をためた痛々しい姿を見て、私も息苦しくなりました。ストローに苦しむウミガメと、不法投棄のある町に住む私を重ね、憤りもしました。「私もウミガメと同じ、ゴミに苦しむ被害者なんだ。」という気持ちだったのです。

当然、不法投棄について学習しているときの私の気持ちも、「ひどいことをする人もいるものだ。」というものでした。浜辺に雑然とうち捨てられているゴミや海上を漂っているビニール袋の写真を見ても「私は海にゴミは捨てていないし」という考えが、頭の中にはありました。

でも、そうではなかったのです。「山」に捨てたゴミは、雨水にのって「川」に流されます。流された先には「海」があり、「海」に流れついたプラスチックゴミは、完全に分解されることはなく、多くの海洋生物たちが口にしてしまいます。自分の身の回りだけを案じていた私にとって、学習を通して知った「海に直接ゴミを棄てていなくても、ゴミはまわりまわって海にたどりつく可能性がある。」という事実は、驚くべきものでした。

私は、ゴミの流出を止めることができる立場にいますが、ウミガメにはどうすることもできません。ウミガメの鼻にストローが刺さったのは、私たち人間の責任です。その「私たち」の中には、自分も含まれているということに、ようやく気づくことができました。「自分ごと」という目で見るようになると、もっと広い視野でもゴミ問題を考えてみたくなりました。

例えば、ゴミ処理についてです。私の住む東別院町には、ゴミ収集場があります。主にプラスチックゴミを埋め立てていますが、調べてみるとあと数年すれば、いっぱいになることがわかりました。正式な手立てでゴミを捨てていれば安心できると考えていた私にとって、それは衝動的なことでした。また、外国では、不法投棄をゼロにするために、様々な取組を行っていることがわかりました。スウェーデンでは、ゴミを輸入して積極的にエネルギーに変え、国民が出す九十九％のゴミをリサイクルに回すことに成功しているそうです。

プラスチックなどのゴミによって、海の生き物や人間が苦しむ。私は、地球の未来をそんな風にはしたくありません。「ゴミ」という言葉が存在しなくなるまで、使った物は一つ残らずリサイクルする。環境に優しい素材を使う。私たちの住む山の景観も美しいまま、生物とも共存し続ける未来にしたいです。

「『ゴミゼロ』の未来を目指す」これが今の私の主張です。私は、できる限りのことを知り、考え、そして行動することで、未来を変えていきたいです。

京都府教育委員会教育長賞

「プラスチック フリーライフをめざして」

亀岡市立亀岡中学校　3年
菅原龍佑

「使い捨てられたプラスチックが世界の海に流れ出す量は、二〇五〇年までに世界中の魚の総重量を上回る！」そんな大きな見出しと共に目に飛び込んできたのは、浜辺に大量に打ち上げられたごみと、海上に漂うごみの写真。「作る責任と使う責任」―この大きな責任をとる覚悟があなたにありますか？と厳しい問いを投げかけられたようで、この写真から目が離せなくなってしまった。

レジ袋やお菓子の包装、ペットボトル……。プラスチックは、私たちの暮らしの中に広く浸透し、私たちは、日々大量のプラスチックを消費し続けている。このまま何も手を打たず消費し続けたら……。プラスチックで埋め尽くされた海を想像するだけでぞっとしてしまう。

安価で軽く、加工しやすい人工素材プラスチックは耐久性も高く、戦後急速に普及したという。しかし、半永久的に分解されないために、様々な問題が叫ばれるようになり、特に、海への流出による海洋汚染が深刻な問題となっている。特に、生態系への影響が大きく、劣化して小さくなったプラスチックがウミガメの胃の中から発見されたり、死んで流れ着いたクジラの胃から、ポリ袋やペットボトルなどが大量に見つかった例も紹介されており、今や、プラスチックは、私たちの生活を脅かす存在になりつつある。

では、これから私たちはどのようにプラスチックとつきあっていけばいいのだろうか。

私の住む亀岡市は、昨年末に「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」を行い、全国で初めての罰則付きのプラスチック製レジ袋禁止条例の制定を目指し、さまざまな取り組みが進められている。

亀岡市がこの宣言を行うに至るまでの背景を調べてみると、今から約十四年前、保津川下りの船頭さんが保津川渓谷の環境保護のために、プラスチックごみとの闘いに挑んだところからスタートしたそうだ。実際、大雨による増水の後はプラスチックごみがむき出しの木の根に大量に引っかかっているのを目にしたり、以前に比べて犬の散歩コースの川のごみが目につくようになった。これらの光景は、決して人ごとではなく、身近な私たち自身の問題なのだと教えてくれる。

しかし、この条例の話を聞いたときは、少し性急すぎないかという、どちらかと言えば否定的な意見の方が正直多かったように思う。昨年末に、クラスでアンケートをとってみたのだが、やはり反対意見の方が多かった。理由として、スーパーなどに出かけるときは、エコバックの持参を意識できるが、そうでない場合は困るのではないか。また、レジ袋を再利用したいと考える人もいた。さらに、現在建設中の新しいスタジアムが完成し、多くの観光客が訪れたときに、レジ袋廃止の趣旨を上手く理解して貰えるのかなど、未来を危惧した意見も見られた。このように、便利さと環境問題を天秤に掛けたとき、便利さのほうを優先してしまう事の方が今はまだ多いのが現状のようだ。

昨年、家族でカナダを旅行したとき、現地のスーパーで、新鮮に感じる出来事があった。フルーツや野菜、肉やチーズ、総菜などをあらかじめパック詰めしておくのではなく、欲しい分だけバイキング方式で購入するといったシステムが機能していたのだ。この方法であれば、余分な包装は省けるし無駄もない。何よりフルーツのいい香りが漂う中で、売り手と買い手が会話をしながら、買い物自体を楽しんでいるように見えたのが印象的だった。かつての日本も、お酒や醤油等はリサイクルのきく瓶売りであったし、買い物に行くときは買い物かごなどを持参するのがあたりまえの光景だったのだ。私たちは、便利さと引き替えに本来大切にしなければならないものを見失ってしまったのではないだろうか。

自然に還るという生分解性プラスチックなど新しい技術の研究も進んでいる。しかし、そのような新たな製品の完成や普及を期待するのではなく、作る責任はもちろんのこと、使う責任、そして使った後の責任を、一人一人がすぐに行動に移すときにきている。新しいルールも、一人一人の意識や行動が変われば新たな習慣として定着していくはずだ。分別の徹底やレジ袋の持参など、できることを習慣化し、プラスチックフリーライフを一人一人が楽しんで実践できる社会にしていきたい。

京都市教育長賞

「命の大切さを もっと多くの人に」

京都市立桃山中学校　1年
大坂昊雅

最近よく殺人事件や虐待のニュースが流れています。京都市伏見区であった「京都アニメーションスタジオ放火事件」は三十五人の方が亡くなられたとても悲惨な出来事です。

現場は僕が通学で通る場所の近くでした。現場付近には、住宅街があり、そこには僕の友達が住んでいます。もし、あの事件が僕らの下校途中に起こっていたら。と思うと、今でもぞっとします。

なぜこのような大勢の若い方々が亡くなり、僕のように心に深い傷を負ってしまわなければならない人がいるのか。それは誰でも分かる事だと思います。一人の男が人の気持ちや後先を考えないまま行動したからです。もちろん被害者、遺族、地域の方々は、この男が起こした事件に、怒りや悲しみ、憎しみがあふれ出していると思います。決して許されない事でもある今回の事件。僕としての意見は、なぜ大人が言葉で解決しようとせずに犯行に及んだのか、またそれを世の中のこれから大人になって行く人達に堂々と「これが大人の対応」と言えるものなのか。これを日々意識せずに今まで生きて来たからこう言う事件を起こしてしまうと考えています。

犯人が犯行に及んだ事で様々な事がネットニュースになっています。これが第二の怖さでもあります。

ネットは正しい情報と間違った情報が混雑している世界。ただでさえ信用がつかないと言うのに、ネットでは、犯人は韓国人だと言うデマが広がっていたり、犯人の趣味や、顔画像、家族構成や犯人の詳細までもが出回っていました。全て正しいのかどうか分からないものです。ネットは、何かの事件があると、すぐに正しいのかどうかも分からない情報を次々と投稿し、その人の個人情報まで出してしまう事が出来る怖いものでもあります。

これらの事に対し、僕としての意見は、まずそれらの信用のつかない投稿をする前に、その人の立場になって考えること。そしてもう一つ大事な事。それは自分を客観的に見ること。なぜなら、ネットは、写真や文で伝える物である。なので、自分の思った通りの文が書けない事だってよくある。その文は、自分では本当の意味が分かるが、それを見た人には誤解される事もある。そんな面もあるという事も踏まえて考えてほしいです。

では、逆に応援のメッセージはどうなるのでしょうか。応援のメッセージは、被害を受けた方の事を思いやれています。その文を見た被害者の方や、周りの人は、心が暖まり、みんなの心を一つにすると いうとても素晴らしい事にもつながると思います。僕は全ての人々がこういった暖かいコメントが出来るような人になって欲しいと思います。

この事を実現するために、まずこれから大人になってゆく僕達の世代から直していくべきだと思いました。なぜなら、例えばラインなどで、相手が傷付くようなコメントを複数人の人が軽い気持ちで書いてしまい、その書かれた子が自殺するといったケースがこの世代他に比べてあまりにも多いからです。

これをなくすためには、「感情任せに行動する」ことをしない事です。

これら全ての事に感じての事で、一部例外なものもある事も知っておいて欲しいです。それは親の教育です。僕や、ほとんどの家庭では、命の大切さなど基本的な事は教えてもらっていますが、そうでない人もいます。その場合は「子が悪いんじゃなくて、親が悪い。」事に当てはまります。こんな結論になるのも当然な事だと思います。なぜなら、その子が友達に暴力を振るったとして、相手をけがさせてしまったが、親に基本を教えてもらってないから常識が分からない。親の教育を必要とする子全員へ親が手を差し伸ばせるようになる未来へとしていきたいです。

最後に僕としての主張をします。

「命の大切さ」とは。一度しかない命。生まれてきた事の奇跡。クラスメイトとめぐりあえた事。何にも変えられない命。当たり前のように日々変わりない生活を送り、生き続ける。しかし、世の中には生きたくても生きれない人はたくさんいる。日々変わりない生活を送りたくても送れない人だっていっぱいいる。なのに、日々生きている人が軽い気持ちで「死にたい。」などと言うのは許せない。この間の放火の事件でも、たくさんの若い人が亡くなった。その人達には夢があった。それを一人の人間が壊した。なぜその人はそんな事が出来たのか。それは命を軽く見ていたからだ。このような人にならないようにするには、命の大切さをよく理解し、日々生きる事と、困った時は誰かに相談する事が大切だと思いました。

そして、僕は今日という日を全力で生きて、生きれなかった人達の分まで生きていきます。

京都府市町村教育委員会連合会会長賞

「言葉にこめる思い」

亀岡市立東輝中学校　2年
村山　浬子

言葉には、どんな力があるか考えたことがありますか。私は、言葉にはたくさんの力があると思います。人を幸せにする力、人を素直にする力、人と人をつなぐ力などたくさんの良い力があると思います。その一方で危険な力、人を不幸にする力もあると思います。その言葉にこめる思いや、その言葉の発しかたによってもその言葉がもつ力を大きく変えてしまいます。

一学期、国語の授業で「言葉の力」というエッセイを読みました。それは「言葉には、それを発している人間全体が反映されてしまう」という内容でした。この授業をきっかけに私は、自分の生活の中で言葉が私にどんな影響を与えているのかを考えてみました。最初に頭に浮かんだのは、応援の力でした。私は陸上部で長距離走を専門に練習しています。長距離走は好きでやっていますが心や体が辛くなることはたくさんあります。そんなとき、私に「もっとがんばれる、まだいける」と力をくれるのは、家族や先生やいつも一緒にがんばっている仲間の応援の力です。例えば大会で千五百メートルのレースを走っている時に応援の力を感じました。ラスト一周の合図の鐘の音が聞こえた時、「もうこれ以上スピードを上げられない、止まりたい、転んでしまいたい」と思うほど辛くなります。そんなときにたくさんの応援の声が聞こえます。「ラストファイトー」「まだいける」「ここから上げて」などたくさんの声が聞こえます。きつすぎて誰が言ってくれているのかわからないときもありますが、声が聞こえると、さっきまで力なんてほとんど残っていなかったのにどんどん前に進んでいくことができるようになります。それは、応援してくれた人が言葉にこめた思いが私に伝わっているからなのだと思いました。

次に頭に浮かんできたのは、学校生活の中で聞こえてくる何気ない会話についてです。休み時間の教室などでキモイ、あほ、バカ、デブなどの言葉が聞こえてくるときがあります。みんなが楽しく笑うような話の中にその言葉が入っていると私は心の底から笑えないし、何かが引っかかります。たとえ、その言葉を言われた本人が笑っていたとしても、何か違和感を感じます。その人は笑っているけれど、本当は嫌かもしれません。むやみに人を傷つける言葉を使わなくてもみんな楽しく過ごすことができるのにと思ってしまいます。でも、少し違う場合もあります。それは、私がテレビを見ていた時のことです。その番組では、お笑い芸人の方が「あほちゃう」と大きな声でもう一人のお笑い芸人の方に言い放っていました。私は、テレビを見ながら思わず笑っていました。楽しい気持ちになりました。これは先ほど私が思っていたことと矛盾しています。言っている言葉は同じはずなのにどうしてこんなに違う思いになるのだろうと私は考えました。その答えは簡単でした。それは、こめている思いが違ったからです。芸人さんは、その言葉にテレビの前の人がどうやったら笑えるかな、どうしたら楽しくなれるかなと考え、たくさんの思いをこめているんだと思います。その違いこそ言葉が、それを発している人間全体を背負うということではないでしょうか。そして私が引っかかりを感じた理由は、乱暴な言葉を使っているからだけではなく、思いもなくその言葉を口にしていたからだと気付きました。

このことから、人を傷付ける言葉も、場合やこめる人の思いによって、人を幸せにする言葉に変えられるのだと思いました。人を幸せにする言葉も気持ちのこめ方によって相手への伝わり方が変わってくると思います。どんな言葉を使うときでも、相手のことをしっかりと考えることが大切だと思います。思いをこめることをみんなが意識したら、今よりもっと幸せがあふれるようになると思います。みなさんも普段使っている言葉に目を向けてみてください。言葉だけが一人歩きするのではなく、言葉の奥にある思いを発する側も受け取る側も大切にできる社会にしていきませんか。

京都府公立中学校会会長賞

「備えあれば憂いなし」

京都府立南陽高等学校附属中学校　1年
鰺坂　一輝

もし、あなたが今、自然災害によって危険な状態に陥った時、どうするだろうか。東日本大震災や熊本地震、度重なる水害など、僕の記憶に残っているだけでも重大な自然災害は国内あちらこちらで起こっている。「備えあれば憂いなし」と言われるように、自宅での安全対策や非常食などを備蓄している人は少しずつ増えているかもしれない。しかし、自宅周辺以外で災害にあった場合など、様々なケースを想定して備えておくことが、本当の防災、そして減災ではないだろうか。

「災害弱者」という言葉がある。災害弱者とは、身体に何らかの病気を患っている人や、高齢者、子ども、外国人、旅行者など、災害の際、避難や復興が困難な状況が生じる人たちの総称である。このような災害弱者でも、安全に避難し、避難所で安心して過ごせる対策が必要となる。

そこで災害が起こった場合、皆の命を守るには何が必要か、どのような心掛けが大切なのか考えてみた。

まず、高齢者や病気を患っている人、子どもに対しては、「地域との関わり」が重要だと考える。災害が起こった時、地域の関わりがあれば、

「向かいのおばあちゃん、足が不自由で、一人では避難できないかもよ。」

「〇〇さん共働きだから、夕方は子どもだけかもよ。」

などと近所住民で安否などを確認し合えるであろう。

次に外国人や旅行者に対しては、「国や自治体の対策」が重要だと考える。旅行者においては土地勘もなく、特に外国人は言葉も通じず、日本語も読めない場合が多いので、コミュニケーションがとりづらい。これらの不自由な事柄の対策として、多カ国語表示の看板やひと目で見てどのような施設かが分かるピクトグラムを統一するなどだ。来年の東京五輪に向けてこれらは進みつつあるが、防災という別の角度から見て、全国的に広げ、統一すべきことだと思う。

さて、無事避難所に到着したとしよう。一番に皆が欲するのは食料だろう。支給される災害備蓄食や炊き出しに並ぶ人々。しかし、安易にその列に並び食べ物を口にできない人もいる。それは噛む能力が低下している高齢者や病気により食事制限のある人、そして食物アレルギーの人だ。実は僕自身、重篤な食物アレルギーで、過去の災害での避難所の状況をテレビで観て、もし自分が…と想像すると怖くなった。我が家では食物アレルギーの僕でも被災した時困らないように、アレルギー対応食を備蓄しており、それに加え、宇治と城陽のアレルギーの人がいる家庭と協力して専用の道具や食品を保管している。被災の状況に応じて互いに助け合えるように、数軒の家に分けて保管しているそうだ。また、アレルゲンの情報や保護者、かかりつけ医の連絡先などを記した「アレルギー緊急カード」を抗アレルギー剤と一緒に通学リュックに入れている。僕の持っているアレルギー緊急カードに似たカードを作成していた愛媛県大洲市では西日本豪雨でほとんどの家が水没したにもかかわらず、ケガ人を出さなかったという成果もある。このように、持病や常備薬、頼れる人の名前などの情報を準備しておくことで、減災につなげることができるのだ。

災害に対しては、まずは自分を守る「自助」、地域で助け合う「共助」、そして最後に公的機関による「公助」三つ全てが大切である。

自助については普段から避難場所などを家族で話し合っておくことも大切であろう。共助については、個人情報保護法の壁があり、難しいが、「向こう三軒両隣」と昔から言うように、地域コミュニティーを大切にすることが「地域ぐるみの自主防災」に必要だ。

災害弱者に対して今の僕にできること、僕だからこそできること…。四月から始めた英語を外国人被災者に対応できるようにすること。また炊き出しの際に、使っている食材の情報を誤食対策として鍋の近くに開示するなど、アレルギーの僕だからこそ気付き、行動にうつせるようにしたい。適切な対策をしていなければ、誰もが災害弱者になりうることを考え、日頃から防災意識を高めておかなければならない。地域のつながりが希薄になっている今だからこそ、日頃から声を掛け合い、顔の見える関係を築くことで、災害に強い地域となるのではないか。そして僕でも被災地で困っている人の手助けができるように、防災知識や応急措置方法を身につけて、地域で支え合う自主防災に取り組んでいきたい。ひとりひとりが自分のできることを考えられる地域こそ、災害に強い地域になれると僕は信じている。

京都府ＰＴＡ協議会会長賞

「目に見えない大切なもの」

木津川市立木津第二中学校　３年
坂崎友香

サン＝テグジュペリの『星の王子様』は、発行から約八十年が経つ今でも、世界中で愛されています。この物語の中に「大切なものは目に見えない」という言葉が出てきます。これは王子様と仲良くなったツキネが王子様に教えた秘密です。皆さんも聞いたことがあるのではないでしょうか。私はこの言葉の奥深さに魅力を感じました。

私達は、目に見えない大切なものに囲まれて生きています。家族からの無償の愛情、友達との絆、将来の目標、気持ちや感情といった思い。それは、知らず知らずの内に、日々を彩り自分の世界を豊かにしていきます。逆に、目に見えないものは存在しないものという考え方は、自分の世界をモノトーンで狭いものにしてしまうでしょう。その代表が、人の心を考えないいじめの問題や、人の悩みを理解できない「他人について関心が無い」と答える人の増加です。相手の心を想像しないから、冷たく自分勝手な行為をするのではないでしょうか。私は、一人一人の持つ世界が豊かであることは、明るく平和な社会に重要なことだと思います。だから、目に見えない大切なものをもっと大事にするべきであると考えます。そして、そのためには想像力が必要であると思います。

皆さんは、こんな体験をしたことがありますか。例えば、勉強が思い通りに進まず自分に自信が持てなかったり、喧嘩をしてしまった後に自己嫌悪に陥ったりした時。自分の長所や行いを褒められて、勇気づけられたことがあると思います。

私は、先日、二年半活動したテニス部を引退しました。短い期間でしたが、楽しさや苦しさを多く経験した思い出深い時間になりました。中学二年生の秋、毎日一生懸命部活に取り組んだ努力が実らずに、私は大きなショックを受けました。その時、私の部活での様子を知る友達や先生が「いつもよく頑張っているね」と言ってくれたのです。努力が実らなかったことに落ち込み、頑張っても意味がない、と自暴自棄になりそうだった私は、この言葉のおかげで、もう一度頑張ろうと思えました。この体験は、今でも心に残っています。何故なら、私の努力の影にある「認められたい」という思いが大事にされた瞬間だったからです。決して言葉にして、努力した自分を認めてほしいと伝えたわけではありません。しかし、友達や先生は私の様子を見て、辛い気持ちを「想像」して、暖かい言葉で私を励ましてくれました。豊かな想像力は、目に見えない傷ついた心を救ってくれたのです。

私はこの体験を通して、目に見えない大切なものを大事にする幸せを知りました。その幸せに気づいたからこそ、身近な人にもその幸せを知ってほしいと思いました。それからの私は、相手の気持ちを想像して相手が幸せな気持ちになる行動をとるようにしています。そして、私のその行動が、きっと誰かの目に見えない大切なものを救うと信じています。

また、想像力は相手が関わらない自分自身のことにも必要です。私は、今数ヶ月後の高校入試に向けて、勉強しています。辛くても諦めないのは、やはり志望校の制服を着ているかっこいい自分を想像して、そうなりたいと思うからです。

大切なものは目に見えません。しかし、最初に述べたように、大切なものは日々を照らし、自分の世界を無限大に広げていきます。目に見えないものは、形が分からないし、扱いにくいです。それでも豊かな想像力で色々なものを見るべきです。そうすることで、目に見えないものはいつしか、確かに存在するものと思えるでしょう。

これから先、グローバル化が進み、人はより多くの人と関わっていくでしょう。そうなれば、多様な人々の様々な考えで出来た大きな社会になると思います。その中で、豊かな想像力で大切なものを大事にし続けたいと思います。一人一人の持つ世界がつながる明るい社会が出来ることを私は願っています。

京都市ＰＴＡ連絡協議会会長賞

「能から考える伝統文化の未来」

京都府立洛北高等学校附属中学校　３年
中馬千陽

今日では、日本文化の幾つもが無形文化遺産に登録されています。例えば、登録の際に話題となった和食を始め、歌舞伎、浄瑠璃などが挙げられます。能楽もその一つです。能楽は、長い歴史の中で、数多くの先人たちを魅了してきた芸能です。しかしながら、近年では見に行ったことのある人や、身近に感じている人が少ないように思います。私自身も少し前までは、内容が難しそう、理解できないのでは飽きてしまうかも、といったマイナスのイメージを持っていました。

先日、学校の体験学習で能について学ぶ機会がありました。そこで能というものがいかに奥深いかを知り、能に対して感じていた印象が変わりました。能といえば面をつけて音楽に合わせて舞うというイメージだったのが、そこに戦いや恋の深いドラマがあると知り、興味を持ちました。

演目が始まると、やはり台詞は聞き取れません。しかし、役者の力強さ、全身から感じる感情の表現の細やかさに惹きつけられ、目が離せませんでした。また、舞台を中心に漂う独特の緊張感に心が引き締まりました。そこで初めて、能ってこんなに面白いものだったと驚き、その魅力に気がつきました。

しかし、どれほど良さがあっても伝わらなければ意味がなくなってしまいます。実際、見に行く機会がなく、ハードルの高さに敬遠してしまう人も多いことでしょう。それは、能にテレビやアニメに感じるエンターテイメント的な面白さを期待するからだと思います。確かに、能には、笑いやスリルの要素という意味での面白さは感じられないのかもしれません。しかし、私は能の魅力はそこにあるのではないと思っています。人間の強さ、弱さ、悲しさなどの本質をついた表現は誰の心にも響く内容ではないでしょうか。そして、学校でも習う古典作品や歴史的な出来事が主題になっていることが多く、自分の知っているシーンで主人公がどう思っていたのか知れるのはとても興味深い面白さがあります。

また、現代には心の休まる時間なく過ごしている人がたくさんいると思います。毎日時計を見て分刻みで行動したり、満員電車で通勤したり、人付き合いに疲れてしまったり。そんな中、能の鑑賞の中ではただ役者の動きに見とれて美しいと感じたり、主人公の思いを感じ取り自分と重ねてみたりと、自分の心と向き合う時間が取れると思います。台詞を詳しく理解するのは難しくても、装束や音色舞の幻想的な世界観に見とれるだけでも十分価値があるのではないでしょうか。だから私は、この現代にこそ能は必要とされていると思うのです。

魅力を知らないうちに、いつのまにか途絶えてしまうのは本当に勿体無く感じます。私たちは普段、伝統文化に触れる機会があまりありません。私も体験学習という機会があって初めて興味を持つことができました。だからまずは、一人一人が、自分から敬遠するのではなく柔軟に受け止め、知ろうとすることが一番大切だと思います。

一方文化のほうもただ型通りに伝えてきただけではありません。時代に合わせどんどん変化してきたのです。近年では、魅力を伝える講座やサウンドエフェクトを使った新たな試みも行われています。そうして時代の変化に対応し長い間人々の心をつかんできました。

人工知能を使った機器や、新しいテクノロジーといった最先端のものに私たちは敏感に反応します。一方、古くからあるものにはそこまで興味を示さずにいます。それでは自分の視野を狭めてしまいかねません。新しいものは古くからの積み重ねの土台の上に存在します。新たな発展を目指すのも良いことですが、振り返ってみるのも同じくらい大切なことだと思います。

そして新しい時代に対応するには、日本人として、自分たちの国がどのような文化に支えられてきたのか知っておくことが重要だと思います。それは、世界には数え切れないほどの地域文化があり、お互いの文化を交流することで違った考えも生まれるからです。狭い世界にとらわれず、幅広い価値観で物事を見ることは、これからの時代では特に大切です。そのために、自国の文化について理解しておく必要があると考えます。それがグローバル化に対応するための第一歩となるのではないでしょうか。

伝統文化は一度失われてしまうと、二度と生みだすことはできません。世代を超え受け継がれてきた文化がこれからも続いていくために、文化に対する再認識が必要だと思います。自分たちの生活がどれだけ文化に彩られてきたのか、その価値を認識していく必要を切実に感じます。

京都新聞賞

「制服に見る男女格差」

京都府立福知山高等学校
附属中学校　2年
辰巳　讃良

今、日本で生活していると、男女の格差を感じることは、ほとんどない。しかし、私は、まだ多くの女性差別が残っていると感じている。その一つが、女子の制服である。

実は、私は制服のスカートが好きではない。普段、パンツ姿でいることが多いこともあり、制服のスカート着用に大きな違和感を感じている。その理由として、第一に、動きにくいということが挙げられる。私は通学で自転車を使うが、風などでスカートがめくれないか、タイヤに引っかからないか、と気をつけなければならない。第二に、常に人の視線を気にしなければならない。階段などでは、スカートの中が見えないか、常に後ろに気を配る必要がある。また、脚の形がむき出しになることで、男子からどのように見られているのか、視線も気になる。

以上のことから、とても機能的とは思えない制服のスカートを、私たち女子だけ着用しなければならないことに、「それが女性らしく見えるから？」と日頃から疑問に感じていた。

そのような思いもあり、私は昨年の秋、初めて冬季のみ許可されている制服のパンツを着用した。スカートに違和感を持っている私にとっては当然の選択だったが、その時びっくりするようなことを多く体験した。

こそこそ何かを言われることや、何度もジロジロ見られることはごく普通のこと。それどころか冬季にパンツを着用できることを知らない人も多く、「目立つといじめられるよ。」と忠告してくれる友達すらいた。勿論、中には「かっこいいね。」と言ってくれる友達もいた。しかし、女子のパンツ姿が増えることはない。一体どうしてだろうと私は思った。

それは、制服に関して、女子や男子はこうあるべきだという考え方が、未だに根強く残っているからではないかと私は考える。私のパンツ姿を「いいね。」と言ってくれた友達の中にも、「本当は着てみたかったけれど、親に反対された。」「着ている人がいなくて、着る勇気がなかった。」とこっそり打ち明けてくれる人がいた。本人にその気持ちがあっても、周囲の環境が許さない場合もあるということだ。日常生活では、男女の区別のないユニセックスデザインの服も増えてきている。だが、制服だけは、21世紀の今になっても、男女の性差が強調されたデザインが使われ続けている。

そもそも、「制服」とは何なのか。調べてみると、着物だった女子の通学服が洋装に切り替わったのは、一九一九年に当時、私立の女学校長だった山脇房子氏により、制服としてワンピースが考案されたからだと言う。着物より安くて動きやすい洋装は、瞬く間に広がり、昭和に入るとセーラー服が優勢になった。もんぺの着用を強いられた戦時下を経て、戦後はセーラー服に加えてブレザーも人気を広げた。

こうして女子の「制服」について、その変遷を振り返ってみると、時代の制約がある中で、着ている女子本人がいいと思ったものが結果的に残っているのだと感じる。そして、もし、そうであるならば、制服のパンツも、それを許す環境さえ整えば、制服選びの選択肢の一つとして、普及していくことも可能なのではないだろうか。

「たかが制服じゃん。」と言われるかも知れない。しかし、女性にのみ「こうあるべき」ということを強制する社会は、男性にとっても、そして誰にとっても暮らしやすい社会ではないはずである。

最近は、自分に合った制服を選択できる学校が増えてきていると聞く。私自身は性同一性障害ではない。しかし、そうした人たちも含めて、誰もが自分らしく、生き生きした学校生活を送ることができるようにするために自分に合った制服を選ぶことが、当たり前の社会になってほしいと、私は思う。

KBS京都賞

「人間の無責任な行動によって失われた命 ～犬猫の殺処分について～」

向日市立西ノ岡中学校　3年
大城　みなみ

私が五歳の頃、公園のブランコで遊んでいると、少し離れた木陰に大きなダンボール箱を見つけた。そういえば、私が公園に来た時にこのダンボール箱をかかえて入って来た少年がいた。しかし、その少年の姿はもうなかった。母が、

「あのダンボール箱さぁ、さっきのお兄ちゃんが置いていかはったやつやんな。もしかしたら、中にネコちゃんかワンちゃんが入っているかも。」

といわれた瞬間、お兄ちゃんが走り出しそれを追って私もおぼつかない足取りで精一杯走った。興味津々で箱の中を覗くと、生まれて間もない六匹の子猫が入っていた。白猫や二匹の灰色の猫と三毛猫、そして黒猫。その中には眼脂で目が開けられない猫の姿もあった。私とお兄ちゃんは最初、可愛い、飼いたいなという気持ちの方が強かったけれど、見ているうちに捨てられてしまったと知って悲しくなった。同じ気持ちの母が、目が開けられない猫の眼脂を優しく拭きとってあげていた時、横にいたお兄ちゃんが足元に歩いてきた黒猫を突然自転車に乗せ、近くの祖父母のお店に走り出した。私もあわてて追いかけた。その後、私達はその黒猫を飼うことになり、「くうちゃん」と名付けた。

丁度その日、テレビで「志村動物園」を観て、野良犬猫が殺処分されてしまうことを知った。何も悪い事をしていないのに、人間の無責任な行動によって飼い主が見つからない犬猫が殺されてしまうのだと思うと私の心には、悔しさと怒りが芽生えた。

翌日、残りの五匹が気になり公園に向かったが子猫の姿はもうなかった。誰かが拾ってくれたのかもしれないが、目が開かなかった子はどうなったのかな。もしかして保健所に…。と思うと胸が苦しくなった。この日から私は、家族になったくうちゃんを他の五匹を救えなかった分まで大切に育てようと決心した。せめてこの子だけでも幸せにしてあげたいと思ったから。

罪のない犬猫が殺処分されるのは大抵がペットを手放した人間の責任。二千十五年に年間で約八万二千頭、つまり換算すると毎日約二百二十五頭ずつ処分されていることになる。保健所に収容される犬猫のうち、二割が飼えなくなって直接連れてこられた子達で、残りの八割は捨てられたか迷子になった子達だった。迷子になっても飼い主の連絡先が分かるように一センチほどのマイクロチップを首の背面に埋め込む方法があるが実際は情報を読み取る機械の普及が低いなどの問題も多いのが事実だ。殺処分の数をゼロに近付けるにはどうすればいいのだろう。

一度飼ったペットを最後まで責任を持って大切に育てることが私達人間に出来る最大の対策法です。それでも、どうしても飼えなくなって保健所にあずけた場合、保護してあげようと引き取りに来る人が殺処分されてしまう期日に迫っている犬猫を優先的に引き取ってあげて欲しいと思います。もう一つの問題として、保護された子の中には性格や健康上で引き取り手が難しく、処分されてしまう可能性の高い子をどう救うかです。動物病院の先生でこういう子のお世話をしてくれそうな家族に情報を提供し、実際に引き取り手となった二組の家族を知っています。新しい家族と先生が連携をとって見守っているそうです。そんな一方で捨てられる犬猫も後を絶ちません。犬猫はどんな思いで捨てられてしまうのか。大好きな家族に捨てられた子。何もわからず怯える子。ガス室に入れられた子。あなたは考えたことがありますか。世の中には、簡単に捨てる人。犬猫に虐待する人。そんな人達も沢山います。犬猫も人間と同じ「たった一つしかない、大切な命」を持って生まれてきています。人間の手で大切に守ってあげて下さい。

私はくうちゃんを育てて、毎日楽しそうにしている姿を見てとても嬉しくなります。一匹でも多くの犬猫の命が救われることを心から願っています。そしてこれからも家族の一員になってくれたくうちゃんと幸せに過ごしていきたいです。

そうすることが、犬や猫の命を救うために人間ができる理想の姿ではないでしょうか。

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「勉強する理由」

向日市立寺戸中学校　2年
上田新奈

私達学生は日々新しいことを学び、それらを頭にたたきこんでいる。そんな中で、自分は何のために勉強し、定期テスト前は夜遅くなっても眠さを堪えてまで勉強しているのだろう、と疑問を抱いたことはないだろうか。もし本当に将来の役に立たないことを、ただテストを切り抜けるためだけにしているのであれば、それはとても無駄なことで、やる気など起こるはずがない。しかし、本当に、今している勉強は今のためだけにしていることなのだろうか。私は、勉強が自分の将来にどう役立っているのか考えてみることにした。

私には夢がある。それは、自分が作ったものを食べてくれた人が笑顔になり、幸せな気持ちになる、そんな食べ物を作ることだ。私は、人がおいしい物を食べた時に笑顔になる瞬間が世界にあふれてほしいと思い、将来は自分が作った食べ物で、その瞬間を沢山作り出せるパティシエールになることを夢みている。パティシエールは一見勉強をしなくても、料理の腕を磨けばなれるような気がするかもしれないが実はそうではないのだ。では、今勉強している十教科はパティシエールになるという夢にどう関わってくるのだろうか。

まず国語はどうだろう。パティシエールはお客様と直接お話しする接客業でもある。そんな時に、正しい日本語を話せず、お客様に悪い印象を与えてしまわないようにするためには、国語は必要な教科だ。話すという点では英語も同じだ。今の日本には、外国の方も沢山来られる。お客様にかぎらず、社会に出た時に英語を話す機会で上手く話せなくては困ってしまう。次に理科と数学はどうだろう。皆さんは「料理は科学だ」という言葉を聞いたことはないだろうか。料理は深く考えると理数と結びつく点がいくつもある。例えばパンケーキがふくらむのは、生地を作る時に入れるベーキングパウダーに含まれている炭酸水素ナトリウムと、酒石酸が反応して発生した水蒸気や二酸化炭素などによって生地が持ち上げられるからだ。しかし、ベーキングパウダーを沢山入れすぎるとケーキが苦くなってしまうのだ。入れすぎないように生地とのバランスを保つ割合を考える時、数学の公式を覚えていると便利だ。次に社会はどうだろう。料理の材料には、それぞれにおいしく作りやすい環境がある。それに適した場所で作られている良い食材を見つけるには地理が役に立つ。

次に、実技教科はどうだろう。ものを作りあげるための基礎知識を学ぶためには、家庭科はもちろん、技術も大切だ。そして、新しいアイデアを考え新商品を作る時には、美術や音楽で身につけた芸術的感性が必要である。体力や筋力がつけられるという点では、実は体育も大切なのだ。なぜなら、何キロもあるなべを持ったり、生地をこねたりする時に体力や筋力がなければなべも持てず、生地も上手くこねられないからだ。

次に、十教科以外で部活動や、学校生活ではどんなことが学べるのだろうか。

一つ目は、先輩や先生方や後輩との上下関係や信頼関係の築き方、二つ目は、難しい問題を何度も解き直したり、出来ないことを何度も練習したりするなどの継続する力だ。これらの二つは社会に出て過ごしやすい環境を作るためには大切なことだ。

このように、今学んでいることが、自分の将来にどう役立っているか考えることで、学校に行って学ぶことは決して無駄なことではないと思えるのではないだろうか。人は、自分の好きなことのためなら苦手なことも努力できる。勉強が自分の好きなことに必要なことだと分かれば自然と勉強に対する意欲も湧き、楽しいと思えてくるのではないだろうか。

今、もし学校に行って勉強するなんてめんどうだし、嫌だと思っている人がいたら、学校で学ぶことがこの先自分の人生に、本当に必要ないことなのか、もう一度考えてみてほしい。そうすることで、今自分に必要なことは何なのか見えてくるのではないだろうか。

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「相手を理解するということ」

相楽東部広域連合立
笠置中学校　3年
柴垣歩乃

「ドラえもん」皆さんはこのキャラクターを知っていますか。言わずと知れた日本では馴染み深いキャラクターです。更に海外でも絶大な人気を誇っています。ドラえもんは、二十二世紀、二一一二年に誕生し、二十一世紀ののび太の世話をするためにやってきたネコ型の子守りロボットです。ドラえもんは四次元ポケットから未来のひみつ道具を出していつものび太を助けてくれます。ですが、ドラえもんには、ネズミが苦手、いざというときにひみつ道具が出てこないなど、他の子守りロボットには見られない「欠点」があります。しかし、ドラえもんが嫌いな人はほとんどいないでしょう。むしろ、「そこがいい」「それも含めて好き」という人が多いでしょう。

では、そもそも「欠点」とは何なのでしょうか。「欠点」これを辞書で引くと「よくないところ」と出てきます。そうだとしたら、「よくないところ」とは何なのでしょうか。何を「よい」とし、何を「よくない」とするのか、実はそれは、地域や国、文化によって全く感じ方が違うものなのではないでしょうか。

この例として、日本では当たり前だと思われていること。「黙って人の話を聞く」ということを挙げてみましょう。日本では、先に述べたように「黙って人の話を聞く」ということが美徳とされています。また「以心伝心」という言葉があるように、相手の思っていることを「察する」という文化があります。話している途中で聞き手が反応したり、質問したりすると「最後まで聞いて」と言われたり、「せっかちな人だな。」と思われてしまうことが多々あります。しかし、こんな日本に対して、他の国ではどうでしょうか。相手が話しているときに聞き手の反応が薄かったり、黙っていると、「聞いていない。」、「この話、興味ないのか。」というふうに捉えられてしまうかもしれません。そして、自分の思いを口に出さない人は、「元々考えを持っていない。」と思われたり、考えが全く相手に伝わらないかもしれません。

このように同じ事柄でも地域や国、文化によってよいこととよくないこと、つまり長所と短所の捉え方が全く変わってくるのです。

実際、私は「よく話す人」は、人の意見に反応し、場を盛り上げられる、考えをきちんと述べる人というプラスのイメージを持っています。しかし、クラスメイトの中には、「よく話す人」は自分ばかりが話して、相手の気持ちを考えられない、話を聞いていて疲れる人というようなマイナスのイメージを持っている人もいます。

このように、同じ日本人で同じ地域に住んでいる人でも、一つの事柄に対する考えが正反対であることがあるのです。ある事柄に対する考えの違いは、その人の価値観によります。価値観は、人の気持ちと一緒で完全に理解することはできません。しかし、人の価値観を理解しようと努力することでその人の見る世界は広く、豊かになります。人の「欠点」それは一概に決めつけるものではないのです。

もし、ドラえもんに欠点が全くなかったらどうでしょうか。おそらく国民的キャラクターにまではなっていなかったでしょう。ドラえもんは人間の特徴を複写したようなロボットです。はっきりした欠点を持つドラえもんがこんなにも愛されているのは、欠点を個性とし、多くの人がそれを理解しているからなのです。

相手の個性を笑う権利は誰にもありません。むしろ、欠点を直そうと努力し、欠点すらもチャームポイントとしてしまえる人間性こそ人間として本当に素敵な人なのではないでしょうか。

私は今、中学三年生です。今は、小さい頃からずっと一緒だった仲間と過ごしていますが、あと少しすれば高校という新しい世界に飛び出します。高校の新しいクラスでは周りは知らない人ばかりです。だからこそ、その新しい出会いを楽しみ、相手を丸ごと受け止めたいです。

私の理想とする社会は、誰もが互いを本当の意味で理解し合える社会です。相手の欠点を意識しすぎると、どうしても大きく見えてしまうものです。だからこそ、皆さんには、欠点を欠点と決めつけるのではなく、おおらかな見方で相手を見る努力をしてほしいのです。そうすれば、私達の暮らす世界はもっと広く、豊かで、暮らしやすくなるでしょう。

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「これからの社会に大切なこと」

舞鶴市立加佐中学校　1年
添田一作

ぼくがこれからの社会に大切だと思うことは、「他国の文化をよく知り、理解する」ということです。その国のことをよく知りもしないのに、他国のことを悪く言っている人を見かけることがあります。ニュースや新聞でも国と国の様々な問題を取り上げているからでもあると思いますが、そのイメージだけで判断し、悪く言うのはおかしいと思います。

少し前に、北朝鮮がミサイルを発射するということがありました。「北朝鮮の人って最低やな。」とか、「北朝鮮って悪い国やな」という言葉をよく耳にしました。けれど、ニュースや新聞で取り上げられていることは、国と国との問題であり、その国の一部の人のことです。そこに住む人がみんな、攻撃的だったり、悪い人である、ということはないのです。

実は僕も、韓国に行くまでは、ニュースや新聞に取り上げられている人が、その国のすべての人がそうであるかのように思っていました。

ぼくは今までに二回、韓国に行ったことがあります。小学校四年生の時と六年生の時のことです。父が、韓国の人たちとの交流会に参加することになり、よい経験になるから…と僕も連れて行ってもらいました。

初めて韓国に行くことになったときは、日本から出ていくのが少し怖かったです。なぜなら、テレビや新聞などで外国の悪いニュースが流れ、日本人に対する悪い感情があるということを知り、小学校四年生の僕は「外国の人は短気で怒りっぽくて怖い」というイメージをもってしまっていたからです。

でも、実際に韓国に行って、色々な人と交流してみると、全くそんなことはありませんでした。韓国の空港に着いた僕たちを韓国の方々は日本語で迎え、歓迎の気持ちを表現してくださいました。韓国滞在中も、言葉は通じなくてもみんなとても温かく接してくださいました。

この時僕は、「あまり他国のことを知らないのに、悪く思っていたな。」と今までのことを振り返り、反省しました。

韓国では、最初は文化の違いに驚いたりしましたが、だんだん慣れていきました。例えば、食事。おかずは銀色の金属の箸を使って食べ、ご飯はスプーンで食べます。食べ物のほとんどが辛い味付けでした。他にも文化の違いはたくさんありました。それぞれに興味深いものでした。そういう文化の違いを知り、理解することが大切だと思うようになりました。そうすれば、その国の良さにも気づけるはずです。

韓国では毎食「キムチ」が出ます。初めは、「辛い」と思いましたが、だんだん「おいしい」と思えるようになりました。韓国は、日本よりも寒いため、体を温めるために、キムチを食べるのは理にかなった文化だと理解できました。このように、実際にその国に行ってみないとわからないことがたくさんあるし、これまでの外国のイメージとは、かけ離れたことがあることもわかりました。何より、僕は行ったことのある韓国のことがより身近に感じられるようになりました。

国際化している現代社会で、他の国の文化をバカにしたり、面白おかしく受け止めたりする人は、これからの社会の変化についていけなくなると思います。

今は、外国に行かなくても、いろんな国の人に出会えます。そして、たくさんの学びができます。いろんな国の人たちと簡単に交流ができる社会だからこそ、文化の違いを理解し、尊重し合うことが大切なのではないでしょうか。それが、たくさんの国との友好関係につながり、よりよい世界を築くことにつながっていくと思うからです。

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「言葉の選び方」

舞鶴市立青葉中学校　3年
早村桃音

私は、言葉はよく選んで発言しなくてはいけないと思います。なぜなら、一つ言葉の選び方を間違えてしまうと、その言葉は人を幸せにする言葉から傷つける言葉に変わってしまうからです。

私がそう思うきっかけになった出来事は二つあります。一つ目は、ある新聞記事を読んだことです。私の学校には、週に二回「朝モラル」というその日の新聞記事から思ったことを書く時間があります。その新聞記事の内容は、いじめによる自殺でした。原因は、暴言を言われ深く心が傷ついたことです。私は、「いじめ」と聞き、暴力と思い浮かんだけれど実際は、体に傷を負ったのではなく心に傷を負ったのだと知り、その時自分自身も暴言によるいじめを知らぬ間にしてしまっているのではないかと思いました。自分自身は、軽い気持ちだったり周りを笑わそうとする行動のつもりでも、相手にとっては傷つく出来事だったかもしれないからです。

私は、あるテレビで「言葉は刃物だ」という言葉を聞きました。その時は特に何も感じなかったけれど、今思うとその通りだと思います。一度言ってしまった言葉はどんなに後悔しても、なかったことにはできません。刃物と一緒で、言葉は間違えると心に刺さり、その傷は消すことはできません。だからこそ、もっと言葉に重みを持って発言しなくてはいけないと思います。

二つ目は、ＳＮＳによるトラブルです。私も、簡単で便利なものでよく使っています。しかし、簡単だからこそ軽い気持ちで悪口を送ったり、誰かの悪口を言い合い共感するんじゃないでしょうか。私も、友達に友達関係について相談を受けた時、最初は相談に乗っていたけれど徐々にそれは悪口へと変わってしまった経験があります。また、友達もＳＮＳで話をしていた時、お互いに意見が合わずけんかになり、それからは話すこともなくなってしまった経験があります。ＳＮＳには、便利などのメリットもあるけれどデメリットもあると思います。例えば、お互いの顔を見れないことです。人と会話する時、相手の顔を見ることで喜怒哀楽が分かり、言葉を選ぶことができます。しかし、ＳＮＳでは画面しか見れないので本当の気持ちは分かりません。

私自身、友達とＳＮＳを通して話していた時、伝えたいことが相手には思うように伝わらなかったり、逆に相手の話について行けなかったりしたことが多くあります。なので、本当に伝えたいことは相手と直接会い、話したほうがいいと思います。すると、間違った言葉を使わず、お互いの意見を理解し合うことができると思います。

私は、言葉は素晴らしいものだと思います。なぜなら、自分の気持ちを言葉で表現できるのは人間だけだからです。例えば、動物は、鳴くことでしか感情を表現できません。だから体調が悪くてもすぐに飼い主は気づくことができません。しかし、人間は「しんどい」と言葉にすることができます。話せることは、私たちにとってはあたり前のことだけれど本当は素晴らしいことだと思います。けれど、私たちは一時の感情で簡単に誰かを傷つけたり、存在を否定したりしています。だからこそ、私たちには「言葉」について考える必要があると思います。

言葉は、簡単に人を幸せにすることも喜ばせることもできます。逆に、不幸にすることも傷つけることもできます。だからこそ、その場の感情任せにするのではなくて、自分が本当に伝えたいことは何かを考えて発言できる人になりたいです。言葉選びを一つ間違えただけで、その言葉は刃物に豹変してしまいます。後からどんなに後悔しても、その言葉は相手の心に傷となり残ります。だから、言葉はよく選んで、不幸ではなく幸せにする魔法の言葉として使いたいです。

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「音での繋がり」

舞鶴市立城北中学校　3年
福田陽生

慣れない黒いスーツ・蝶ネクタイを身に着け、僕は一人の奏者として、舞台に立ちました。

現在、中学校の吹奏楽部で打楽器を担当している僕は、今年の四月、縁あって一般の吹奏楽団の定期演奏会に団友として出演しました。

本番一週間前の練習の事でした。ある曲の中盤に、盛り上げる部分がありました。僕はとりあえず「こんなものだろう」という感覚でたたいてみました。

「そこ、もっと出していいところやで。」

と指揮者からの指示が入りました。その時は、指示に応えようと、丁度いい音量で出るように自分なりに微調整してみました。しかし指揮者の反応は「いまいち」・・・。何回かやり直すうちに、僕は、遠慮と不安で大きな音が出せなくなってしまいました。すると、

「なあ。一回怒られてもいいからさ。思い切って自分が思う音を出してみな。怖がらんと。」

一人の団員さんが、言われました。何も言い返せなかったけれど、その言葉で、自信が湧き上がってきました。

「それじゃあ、自分の思うようにたたいてみて、後は周りの団員さんたちに任せよう。」

指揮者が最後に一回というので、自分では出したことのないくらいの音で楽器をたたいてみました。すると、指揮者もその団員さんも「うん」と大きくうなずき

「自分の楽器の音は、遠慮せず、出すところは出さないと。そこは、自信をもっていいよ。」

と言ってくれました。

吹奏楽では、自分と同じ打楽器を担当している人はいません。つまり、僕の出す音が、全体の演奏の出来を左右するといっても過言ではありません。この時、僕は、自分がこの団体で中学生としてではなく、一人の社会人として、奏者としての責任があるという事を実感しました。部活ではないので、音楽歴が長い人や現役のプロ演奏者、久しぶりに楽器を始めた人など、個人で違う音楽表現が出てきます。音楽としてのルールを守っていても、その人なりの演奏の仕方が必ず見えてきます。それを一つの曲として指揮者がまとめていくのです。

今回大人の人と一緒に演奏してみて「いい曲にするために自分はどうするのか。」という意識が大切だと実感しました。僕が練習に参加させてもらう前は、

「やっぱり大人は、僕らよりも、上手いな。すごいな。」

としか思っていなかったけれど、一人の「人」として、「演奏者」として責任を果たすことが周りとの良い関係を築いているのだと気づきました。

僕は、吹奏楽に出会うまでは、何かに夢中になることなんてありませんでした。どちらかというと、自分の思いよりも、周りの雰囲気や友達の思いを優先して、波風が立たないようにふるまうことが多かったように思います。そんな僕が、この経験をとおして、自分らしさを求めて表現できるようになりました。

この団体だからこそできる、人間関係は僕の一生の財産です。今やスマホの「ライン」やＳＮＳでたくさんの人と繋がり、出会うことが可能になりました。しかし、それは表面上の付き合いだけであり本当の人間関係ではないと考えます。画面上の文字を使ってやり取りすると、自分らしさというものを表現できない部分があると思います。決して使うことを否定はしません。しかし僕は、音楽、つまり「音」を使って表現することの素晴らしさを知っています。その音は録音ではない、生のその人らしさが出ている音です。

人は、誰かと繋がることで自分の価値観や考え方を変える事ができます。

僕は、自分の目で耳でそして「音」で人と繋がり、よりよい人間関係を築いていきたいと思っています。

京都府青少年育成協会会長奨励賞

「あの日のポピーを眺めて」

京都文教中学校　1年
有田芽以

着いたよ、という言葉に車を降りる。駐車場のすみ、健気にポピーが一輪ゆれていた。その光景をどこかで見たことがある気がして、私は記憶の糸を必死にたぐりよせる。すると、ずっと忘れていたあの記憶が少しずつ蘇ってきた。

私は小学二年生で、通学途中、畑を眺めるのが好きだった。その時特にお気に入りだったのは、畑のすみにたった一輪で咲いていたポピー。毎日ちょっとずつ様子が変わって見えた。晴れた日はわくわくした感じ、雨の日は少ししょんぼりした感じ。もしかしたら、それはポピーの様子ではなく私の気持ちを表していたのかもしれないけれど、とにかく私はそのポピーを眺めるのが好きだった。

しかし、ある時からその畑に重機が入るようになった。何か建物が建つのだという。私はとてもショックだった。ポピーさんはどうなっちゃうんだろう、と心配だった。

そこで私は友達と一緒に作業員の方に声をかけて、ポピーさんを何とかして下さい、とお願いすることにした。作業員の方はにこにこ笑って、ポピーを土ごとバケツに植えかえ、作業をしていない方に移動して下さった。

私は思い出して、我ながら、よく勇気を出せたなあと思った。今だったら作業員の方に声をかけることなど、到底できそうもない。いやその前に、そもそも畑のすみのポピーに気付くことすらできないのではないか。あの頃と今で、私は変わった。そのことは確かだけど、その変化を「成長」といっていいのか、私は分からなくなってしまった。

「成長」って何なのだろう、「大人」って、「子ども」って何なのだろう、などとぐるぐる考える。数字の上では十八歳からが大人で、それに近づいていくのが成長なのだろうけど、それだけではない何かがある気がした。

そして、見つけた。大人とは、当たり前のことを当たり前にできる人のことなのだ。挨拶、礼儀正しく振る舞うこと、常識を考えることなど。それら当たり前だと言われることが普通に行え、そしてそのことを当然だと思っている。だからより高度なことができるのだ。当たり前のことができていなくては、高度なことはできない。

それに対して子どもは、生活が疑問と驚きに満ちあふれている。大人が当たり前だと思うことの一つ一つに疑問や驚きを感じるため高度なことはできないが、その分大人が気が付かないような根本的な部分で新たな発見をすることができるのだ。

このことに当てはめて考えると、あの頃と今の私の変化は、やはり「成長」といえる気がする。私は当たり前のことを当たり前に思えるようになったのだ。地域の畑がどんどん少なくなっていくこと、建物を建てる時は畑の花を抜いて捨ててしまうこと。当たり前、というより仕方ない、の方が近いかもしれないけれど。そういった出来事に感情を大きくゆすぶられることが少なくなっていくのが成長なのかな、と思った。

大人と子どもは、視点が違うのだ。それらの視点はどちらも優れていて、どちらも劣っている。どちらかが良くて、どちらかが悪い、なんて決められるものではないのだ。双方が足りないところを補い合うからこそ、より良いものが生まれるのだと、私は思う。

これからどんどん、私の視点は変わっていく。見えなくなるものがあり、見えるようになるものがある。見えるものが変わっていくにつれて、子どもの視点から見ていた世界がどんなだったか、忘れてしまうこともあるかもしれない。そして、自分も小さい頃は子どもの視点から見ていたことすら、忘れてしまうこともあるだろう。しかし、そんな時にはふとした瞬間に子どもの頃の思い出が鮮やかに蘇るはずだ。その思い出をずっと大切にしていれば、あの作業員の方のように、子どもの視点も大切にした行動ができるだろうか。

ポピーが一輪咲いていたあの畑は、今では農業協同組合になっている。そこを通るたびに私は、心の中で誓うのだ。大人の視点も子どもの視点も大切にしよう。あの作業員の方のような大人になれるように努力しよう、と。

私は今、小学校の先生になりたいと思っている。あのポピーは私に、どんな大人になりたいかという目標に気付かせてくれた。私は心の中のポピーを枯らさないようにしながら児童一人一人に寄りそえるような先生になるという目標を持って、変わりゆく自分の視点を楽しんで毎日を過ごそう、と心に決めた。

第41回「少年の主張京都府大会」

講　評

京都府教育委員会の柳澤でございます。本大会の講評を述べさせていただきます。

まずは、発表された皆さん、お疲れ様でした。そしてありがとうございました。私がこの「ありがとうございました」という言葉を使いましたのは、皆さんの主張を聞かせていただき、色々なことに気づかされ、また、考えさせられたからです。

少年の主張京都府大会の作文募集のチラシには、目まぐるしく変化する社会環境の中、「大人」「学校」「社会」などに対して、感じている思いを伝えてみませんか？という問いかけが書いてあります。その問いかけに対し、皆さんは様々なテーマで応えていただきました。

テーマは同じでなくても、皆さんに共通していたのは、自分の思い、感銘した事、あるいは提言を流々述べるのではなく、他のことと関連付けたり、別の物の見方や考え方と比較したり、様々な事柄を総合させたりして主張を行ったことです。そのことが、皆さんの思いや考えに広がりと深まりを持たせ、会場の方にきちんと届いたからこそ、聴き手にとって大きな学びの場になったのではないかと考えています。

このことは、審査においても関係しました。「提言や提言を実現・実践する意欲が感じられたか」だけではなく、思いや考えに広がりと深まりを持たせる中で、「論旨の構成に安定感があったか」、「新しい情報や視点が組み込まれていたか」「個人の体験にとどまらせず、一般性あるものとして感じさせたか」といった点も審査のポイントになりました。審査員が作文を読むという形式ではなく、発表を聴くというスタイルでの審査でしたので、「説得力のある話し方であったか」や、「聴き手にとって印象に残る発表であったか」も審査の大きなポイントになりました。

その中で知事賞を受賞された堤さん、本当におめでとうございます。また、賞の名前は異なろうとも、皆さんは多くの作文の中から選ばれてこの京都府大会に出場しており、高く評価されます。府の大会にまで進んできた自分に、自信と誇りをもってください。

緊張の中、時間的な制約の中、大きなホールで人前で発表するという体験は、なかなかないものです。今日の貴重な体験が、今後の皆さんの成長を少しでも後押しするものとなっていたら嬉しく思います。

最後になりましたが、保護者の皆さま、ＰＴＡ関係の方、学校の先生方、他、会場にお集まりのすべての皆さま。本日の大会の様子や発表者にみられた一人一人のよさを、御家庭で、地域社会の中で、あるいは学校で、情報共有していただければと思います。そのメッセージは、発表者にとって私の講評よりもずっと価値あるものになると考えます。よろしくお願いいたします。

発表者の皆さん、本当にお疲れ様でした。そして、ありがとうございました。以上で大会の講評を終わらせていただきます。

京都府教育庁指導部学校教育課
首席総括指導主事　　柳　澤　彰　紀

「少年の主張全国大会」
～わたしの主張２０１９～
内閣総理大臣賞受賞作文

心の扉

東京都　筑波大学附属
視覚特別支援学校（中学部）一年
藤田　大悟

「視覚障害はただ目が悪いだけで、努力すれば健常者と同じように勉強できる。」

普通小で日々を過ごす中、こんなことを思っていました。今思えばその気持ちの後ろには「みんなに遅れを取らないように頑張らなきゃ。」という一心で自分を追い詰め、クラスから自分を守ろうとする見えない鎧を身につけていたのだと思います。

六年生の春。鎌倉への遠足での出来事です。鎌倉は山道も多いことから当初は行くことに乗り気ではなかったのですが、思い出作りと思って行くことにしました。

「班全員で最終チェックポイントを回り終わること。終わった班からお弁当。」というルールで遠足がスタート。全員がチェックポイントめがけ走り出し、班のみんなもどんどん進み、僕との距離は離れていきました。

「僕が視覚障害ってこと、知ってるよね。少し待ってよ。」

と思いましたが、次第にみんなの姿も鎌倉の山道の中に消えていきました。

やっと合流した最終チェックポイントで、

「お前のせいで回るのが遅くなったじゃないか。」

と言われ、愕然としました。

「ごめん。」

この言葉で精一杯でした。遠足終了。

僕は遠足の後、

「みんなの気持ちもわかるけど、あんなことを言われて解決しないまま卒業したくない。」

とじっくり解決の道を探っていました。ふと、

「僕の見え方、配慮して欲しいことを皆に説明したことあったかな？」

と考えた末に「自分」をスピーチで伝えることにしました。

十一月七日、ついにその日が来ました。まず器具を使って僕の見え方を体験してもらうと、

「大悟ってこんなに見えてなかったんだ。」

という第一声が飛び交いました。見え方さえ分かり合えていないことを知り、今まで説明していなかった自分が情けない反面、話せて良かった、という安心感が複雑に混じりました。次に配慮して欲しいことなどを伝えてスピーチが終了。

この日は僕にとって貴重な一日となりました。なぜなら、予想以上にわかり合えていなかったことを知り衝撃的だった一方で、現状を伝える大切さを痛感したからです。

そして、スピーチから一ヶ月経った十二月八日、音楽会を迎えました。僕は学年代表としてピアノ伴奏をすることとなり、日々練習に励みました。

本番当日、保護者を前に異様な緊張に包まれた体育館で演奏が始まりました。不覚にも数小節の音が抜けてしまいました。が、日々練習を重ねたことで幸運にも伴奏を再開できました。しかし伴奏終了後は、あれだけ練習したのにという、やりきれない思い、合唱を台無しにしたという罪悪感、鎌倉の時のように皆から責められ孤独を味わうのではないかという恐怖、様々な思いが一気に押し寄せます。今までにないほどの涙が溢れました。

恐る恐る教室へ帰るとなんと予想に反してみんなが励ましの声をかけてくれたのです。この時僕は辞書を引いても適する言葉が見つからないほど幸せな気持ちでした。スピーチで皆が本当の僕をわかってくれ、一人のクラスメイトとして受け入れてくれた、と肌で感じられたからです。同時に、皆に対して構えていた僕の中にあった見えない壁も崩れていきました。この瞬間、気持ちが初めて通じ合い、障害という枠を超え認め合っている仲間の証拠を感じられました。

この体験で新たなことに気づきました。

それは、「自分が障害者だから自分を理解してもらおう」と相手にばかり求めるのではなく、自分も心を開いて相手を受け入れる必要があるということです。このことは当然のことのようですが、その一歩を踏み出すのはとても勇気のいることでした。だからこそこのような体験ができてとても嬉しいです。この体験を心のノートに太文字で書き記しておきたい。

「心の扉を開こう。そして、Let's チャレンジ。」

≪青少年健全育成啓発チラシ≫

内 容

「青少年の健全育成」　「少年非行、いじめ」
「ひきこもり、児童虐待」「インターネット」
「薬物乱用防止」　「青少年相談窓口」 など

詳細は、(公社)京都府青少年育成協会 HP をご覧ください。
URL　http://kyoto-seishonen.or.jp/

育成協会 HP QR コード

公益社団法人　京都府青少年育成協会

京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町 104 番地の 2　京都府庁西別館 3 階
TEL 075-417-0602　FAX 075-417-0603　e-mail kpyda@cello.ocn.ne.jp